

もなく自己を主張し返して、互に鎗を削りあつて居る親や先生を見ることがあります。又子供の強情を撻めようとして、却つて抵抗のお相手になつて、之れを募らせて居るのを見ることもあります或はまた愛の足りない、たゞの巧者から、うまく子供をあやなして、其の場は成功しても實は子供を人わるにして居るのを見ることもあります。之れ皆『きかぬ子』の本質を明かにしないから起る誤りであります。

第二の要訣としては、上に述べました處では良き意味の『きかぬ子』と悪き意味の『きかぬ子』とは截然兩つに分たれて居るかのように見えますが、

これは抽象した分解的なお話で、事實は、さう區別せられて居るものではありません。良き意味の『きかぬ子』にも、悪き意味のものになる傾向あり悪き意味のものも良い意味のものになり得る傾向を有して居ますので、きかぬ子を全然悪いもの扱ひするのは大きな間違であります。『きかぬ子』が素直にはなつたけれど、張りも意地もない意氣地なしになつたのでは臺なしであります。小さい、對象的な『きかぬ子』は無くなつて、大きい、自主的な、良き『きかぬ子』を作らなければならぬのであります。

森の幼稚園(六)

五月初めのことでした。裏の井戸で足を洗つて居ると、先生がいつもの黒い帽子に太いステッキを持つて散歩から歸つて來られて、『花田君、今夜新茶を飲みに來給へ』と誘つて下さつた。

先生は、時々お忙しい中に暇を作つては、斯うして吾々を茶に招いて下さる。茶によばれるといふと、大層ハイカラめいたことの様であるが、先生のは少しもそういふ風ではない。北海道の友人から林檎を貰つたからとか、甲州から干柿を貰つたからとか、季節々々の到來ものなどを中心にして、呑氣な閑談に樂ませて下さる。それも、奥さんとお嬢さんとで、餅草を摘んで、一日が、りで草餅が出来たとか、信州から新蕎麥の粉を貰つたからとかいふ特別な時を別にしてはふだんは大抵一人か二人を靜に呼んで下さる。毎日々々忙しい用や、子供の相手に氣を働かしてばかり居ては、ついでに心が、動き易い、淺い軽い一方のものに

なり過ぎる。それがあながち悪いといふのではな
いけれども、時には、しんみりとした、深く重く
落ちついた自分といふものを味ふこともなくては
ならない。自分の修養を離れて人の教育は出來な
い。幼児教育とて同じことである。さしあたりの
問題に餘りに多く囚はれては、教育の仕事には熱
心でも、自分がお留守になることがある。時折り
は『教師』といふものでない、たゞの自分をも靜に
味ひましようといふのが、先生の茶のお心と思は
れます。

私は其の夜、夕餐の後一寸用をして、先生の書齋をお訪ねしました。

『やあ、その大きい椅子へかけ給へ、大分ゆつくりだつたじやないか』

『はあ、一寸母の處へ手紙を書いて居まして』

『お郷里ではお變りないかね』

『有り難う御座います。昨日も母から手紙が參り

まして、皆丈夫だと申して來ました』

『そう、君は幸だねえ、いゝお父さんとお母さんともつて。』

『先生、その本は何で御座います』

私が来る前、先生は藤の安樂椅子で身を埋めて水色表紙の支那本を讀んで居られました。私が上つたので、それを閉じて前の小卓の上に置かれました。その本を指して私は斯う尋ねました。先生は丁度下になつて居た表紙をかへして、

『傳習録だよ』

先生が王陽明を愛讀せらるゝことは豫々聞いて居ました。

『一と口でいふと、王陽明の教へはどういふのでしよう』

『一と口と言つては困るねえ。丁度こゝに君の面白がりそうな句があるよ』

先生が開いて見せて下さつた處を讀むと『如二木

之栽培灌溉一是下學也。至三於日夜之所、息條達暢茂、乃是上達。人安能預三其力一哉。』と書いてあります。成る程之れは私にも分る。

『ねえ君、君の専門の園藝から言つたつて眞理だらう。栽培や灌溉の必論は勿論さ。併しその工夫が如何に精微を極めたつて、そのみで植物が生育する譯じやないといふだねえ』

先生のガーデン主義は、こんな四角い字の古い本でも賛成してゐるのかと、儒學に昏い私は大層珍らしいことに思ひました。

そこへ奥さんが茶を持つて來て下さつた。

『いらつしやいませ。花田さんには甘いチヨコン

一トの方がおよろしいんでしよう』

奥さんの優しいお顔を見ると、母に逢ふ様な心持がします。

『いゝえ、之れでなか／＼風流なんで御座います』

『花田君の風流はおもしろいねえ、ハ、ハ、ハ』

『ハ、ハ、ハ、。随分いゝ香で御座いますねえ。私は新茶を飲むと祖父のことを思ひ出します。茶が好きでしてねえ。』

『花田さんはほんとにお優しいんですね。こないだも美山さんがそう言つていらつしやいましたよ。花田君と話してると、きつと家の人のことが出るんですよつて、』

『孝子之有ニ深愛ニ者必有ニ和氣。有ニ和氣ニ必有ニ愉色。有ニ愉色ニ者必有ニ婉容。だね』

『そんなことはありませんよ。奥さん一寸その急須を拜見。私は新茶を一煎した後の葉の色が、何ともいへず好きなんです、茶畑の新芽を見るように』

『ハ、ハ、ハ、花田君の風流は、矢張り植物學的風流だね』

『先生、さつぎの句のような、私にも分りそうな處はもう御座いませんか』

『そうさねえ。之れも君に面白いだらう。初種根時只管栽培灌漑勿レ作ニ枝想。勿レ作ニ葉想。勿レ作ニ花想。勿レ作ニ實想。懸想何益。但レ不忘ニ栽培之功。怕レ没レ有ニ枝葉花實。』

『なる程、之れは先生が始終おつ仰やる教育の要訣と同じ教ではありませんか』

『王陽明は立志の脩養を教へて居るのだけれども、之れを直ぐ教育上の教へにも解せられるねえ。『懸想何んぞ益せん』といふ句が殊にいゝねえ。枝をどうしようの、葉をどうしようの、花をどうしようの、實をどうしようのと、餘り考へ過ぎた教育は飛んだ弊があるからねえ。幼稚園なんかでは殊にそうだよ。』

『そう考へて行くと、教育といふものが、ゆつたりとしたものになりますねえ。』

『もう一つ如何です』

『どうぞ』

『一つおつまみなさいました』

『はい。此の風流人はお茶だけでは……』

『オホ、、、澤山召上りませぬ』

やがてお暇して外へ出ると、新茶と王陽明とで、すがくしくなつた私の頭の上を、夏の初めの淡い月影が、しつとりとして照らして呉れます。

雑録

清水行

(静岡縣保育會總會)

節句に近い新緑の東海道は、村毎に鯉幟の見えるのが嬉しい。中にも、こんもりとした若葉の森をひかへた、人ざと遠い小さい一軒家に、赤い新らしい鯉幟の翻へるのを見た時は、餘りの嬉しさに胸の踊るをさへ覺へた。殊に蕪村の名吟「富士

一つ埋み残して青葉かな」の大景に、發流の鯉幟、吹流し勇ましきは、清爽の畫趣盡さざると共に、「吾れは日本國を愛し、其の子供達を愛す」てふ念ひの、今また新らしく胸をついて湧き起る感がある。年々歳々青葉久しへに新らしく、町に、村に、里に、初鯉幟いよゝゝ大きく、其の數ますます多かれとは、四月二十八日清水港に開かれた静岡縣保育會大會へ行く、急行車中の感想であつた。

午前の研究會には、縣内各幼稚園から豫て提出せられてあつた左の諸問題が、各員の實驗に基いて討議せられたのは甚だ有益であつた。

一、新入園兒の取扱方につき

(静岡幼稚園提出)

二、家庭の階級を非常に異にする幼兒をひと組

としたる場合には如何に取扱ふべきか

(沼津幼稚園提出)